

## 書評

## 沖田吉穂著 『フランス近代小説の力線』

水声社、2018年、総408頁

八木 斉 子

『フランス近代小説の力線』には実質上のまえがきがあり、それは次のように始まる：

サルトル『嘔吐』の主人公アントワヌ・ロカンタンは、大西洋航路の発着する港町ブーヴィルの市立図書館に通って歴史書の執筆をしている。しかし空き時間には、1人で町歩きをするか、カフェで給仕や他の客の様子も眺めながら、やや漫然と時間を過ごすのである。(11頁)

本書の題名と目次に鑑みて、著者が分析の対象とする主な小説はフローベール、ゾラ、そしてブルーストによるものであるはずだ。何故『嘔吐』が本書の冒頭に来るのか。答えへの布石は数行後に示される：

そんな彼も日曜日には研究資料ではなく、ふつうの本を持って外に出る。  
…午後1時になってプラスリーに入る。…アントワヌは携行して来た本を開く。バルザックの『ウージェニー・グランデ』である。(11頁)

著者が読むという行為とアントワヌが読むという行為は入れ子構造となる。フランス近代文学を著者は「大革命が一举に呑み込んだ社会変革の塊を、100年かけてフランス人たちがなんとか消化していく、この国民的な物語の一環」(13頁)と定義する。文学を教える著者と学生達が「旧政体以来の貴族街と新興の金融・産業資本家層の住まう街区との対抗関係」を扱うとしよう(13-14頁)。「政治史・経済史の理解が欠かせない」とする著者は、同時に、「この対抗関係と同様の構図は、アントワヌ・ロカンタンが日曜朝にブーヴィルの繁

華街トゥルヌ・ブリッド街を市民に混じって散歩して、その整備のプロセスを語るところでも出てくる」とこの主人公をまた引き合いに出す(14頁)。学生達に講じる著者は「語る」アントワヌと入れ子を成すことになる。本書のキーワードは「力線」(16頁)である：

…詩や演劇、小説や批評の内部の歴史に対する方向感覚、作品相互間に確認できる引力と斥力を考えてみれば、文学の場にも一種の「力線」が描ける。傾向を探ろうとする編集者や批評家は無論のこと、作家たちもそうした志向と意欲をもって仕事をしているのではないか。(16頁)

翻って、ブーヴィルは新米の教師サルトルが着任したル・アーヴルを下敷きとしたものであると著者は記す(18頁)。アントワヌやブーヴィルといった架空の人物や都市もまたそれぞれが力線に関わるのである。

フローベールに焦点を当てる第1章において「記号」がまず説明される：

小説の記号が社会的記号の審美的操作に他ならない以上、物語の制作は文化状況に対する働きかけとしての有効性を追求する限りにおいて、日常言語の記号生産に依拠することからしかその作業を始めることはできない。

(26頁)

著者はフローベールが正にそのとおりの作業を行ったとし、『ボヴァリー夫人』の第2部第8章を4段階で分析する(27-49頁)。詳しく追ってみよう。

主人公エマと夫が越してきた「ヨンヴィル」は架空の町であるが、分析の第1段階として、著者は小説が提供する「地理的」(27頁)情報を丹念に整理したうえでヨンヴィルの所在場所を「15キロ程しか離れていない実在の2つの町の間」(29頁)とまで特定する。第2段階においては、ヨンヴィルで開かれる「農事共進会」(25頁)——小説の第2部第8章はこれをめぐって展開する——という名の「祝祭」(30頁)が「政府の政策的意図に基づいて催される官製行事」(30頁)であると指摘される。県参事官リユーヴァンは「農事共進会が束の間ながらも階級の垣根を取り除き、現実の社会関係に代わって理想の、あるいは

夢の中の共同体を浮かび上がらせるものとなるべきこと」(36頁)を示唆する演説をぶつのである。さらに第3段階として、著者はこの日だけ「劇場に近い空間」(25頁)となったヨンヴィルの「役場2階」(41頁)で「全体を見おろしながら、誰にも見られ」(41頁)ずに対話するエマと地主ロドルフを分析する。前の段階で指摘された「夢の中の共同体」はここで「恋愛の企て」(38頁)を説明し得るものとなる。「生のエネルギーを一定の方向へ誘導し、他者の、あるいは自己の人格全体を支配する力の生成が問題となることにより、権力がなすべき仕事を内包せざるをえない」かぎりにおいて、恋愛の企ては農事共進会が持つ「政治的機能」の変形であると著者は判断する(38頁)。そして、記号のより技法的な側面に注目した分析が第4段階である。著者は第2部第8章が「恋愛のディスクール」ならびに「政治・行政的ディスクール」の「効果」と「受容」を「十分に報告している」とみなす(45頁)。恋愛のディスクールを例とするならば、それがエマの「同意だけでなく参加を実践として引き出すべき教導のプログラム」(48頁)として有効であるか否かを小説はここで評価するのである(45-48頁)。勿論、著者は「エマの理解する愛の国」(49頁)が小説全体からみれば夢に終わることも確認する(48-49頁)。

この小説をめぐる分析はさらに続く。エマが飼っていた犬の名前が「ジャリ」であったこと、ユゴーによる『ノートルダム・ド・パリ』の主人公エスメラルダの飼う山羊が同じ名前であること、そしてエマを描写する文の一部に『ノートルダム・ド・パリ』への言及があることを著者は指摘し(52頁)、それらが要素となる力線を議論する(54-73頁)。地勢であれエマの行く末であれ一切を言語化する『ボヴァリー夫人』の「語り手」も狙上にのぼる。小説は「語り手の現在時」(75頁)をどこまで明らかにしているのか——語り手が「教会の鐘楼の上に回っているブリキの三色旗」(75頁)を紹介する箇所注目する著者は、それを図像学的に解きほぐし、「政教関係」(78頁)へと議論を発展させ、上の問いに答えていく(75-95頁)。

著者は第1章の最後で『感情教育』へと分析の対象を移す。『ボヴァリー夫

人』になく『感情教育』にあるものは「19世紀半ばにフランス人たちが持った政治的な経験」(98頁)、つまり、「七月王政期から第二共和国の終焉にまで至る国民的な運命」(106頁)の「個別・具体化」(106頁)である。それまで「ミクロの解説」(25頁)にほぼ徹していた著者はこの小説にいわばマクロな分析を施す(106-134頁)。

ゾラを扱う第2章は頁数にして前章の約3分の2に収まっているが、これを追うには体力が必要である。著者によれば、

…たとえば様々な肉体労働や手仕事の時間を読者が共有できることはゾラの小説を読む大きな楽しみの1つのはずである。一見長々と続く激しい労働の場面を、読む時間の持続によって読者は人物と同じ密度で生き、それを通じて書かれたものの受容が身体の体験に近いものとなる。(137頁)

「視覚以上に嗅覚と皮膚と筋肉に訴えかける描写」はゾラによる小説を「すぐれてスキャンダラス」にする(137頁)。それを著者はこの章で『居酒屋』、『ジェルミナル』、そして『獣人』の分析へと「再構成」(138頁)するのである。『居酒屋』を例にとってみよう。

著者が『居酒屋』を分析する際の枠組みは「至るところで吹き出す蒸気や湯気、熱加工を受ける繊維や金属、繰り返し殴打を受けて踊る肉体」(138頁)である。小説のかなめが「叩くこと」(138頁)にあるとする著者はこの枠組みを「エネルギーの保存と変容」(138頁)と呼び、それによって叩くことは具現化されるとともに抽象化される(138-149頁)。登場人物の1人であるグジェは「切断した鉄の棒をふいごで激しく燃え上がらせた炉によって白熱させたうえで、ハンマーで何度も強打することにより加工する」鍛冶職人である(138頁)。一方、「並んで洗濯をするボッシュのおかみ」を驚かせるほどの「激しさ」で繊維(洗濯物)を叩く登場人物はジェルヴェーズである(139頁)。「巨大な蒸気機関によるポンプが熱い湯を送り出し、すでに脱水器も回転していて、洗いすすぐという仕事だけがまだ人間の労働に委ねられている」洗濯場(139頁)に

おいて機械と人間は「等価物」(139頁)であると指摘する著者は「洗濯棒を用いての殴りあい」(140頁)となるジェルヴェーズらの争いを「熱機関としての人間が侮辱によって体をわなわなと震わせ、怒りを沸騰させて、叩くという腕の往復運動へとエネルギーを変容させてゆく基本図式」(140頁)と言い換える。翻って、グジェ達のすぐ横では「機械による製造工程」が同時進行しており、グジェもその意味でジェルヴェーズと同じ立場にある(140頁)。しかし、仕事の中のグジェを「神のような全能の存在」と捉えるジェルヴェーズにはハンマーの「打撃」が「求愛の動作」のごとく響くことに著者は注目する(141頁)。小説の「根源」(142頁)であるアルコールが——「肉体に対する直接の殴打」(148頁)となって——登場人物達を遅かれ早かれ「自己破壊」(149頁)へいたらしめる(148-149頁)のであるが。

フローバールと異なり、ゾラには批評家また理論家としての顔もあった(190頁)。第2章の最後で著者はゾラによる『実験小説論』をふりかえる。世の中が「ゾラからの離反」(189頁)へ出た1880年代後半以降、「虚構の世界について科学的実験を語ることの誰の目にも明らかな虚妄」(191頁)を集約したこの文学論はゾラの汚点とみなされてきた(189-191頁)。しかし、著者にとって話はむしろ逆である(191-207頁)。「真実」なるものの「提示ないし証明」を徹底して試みたゾラらは、結果として、「真実の単一性を前提とする言説構造が崩壊」する20世紀を招き入れたからである(206頁)。

結果の一端がプルーストであったことになる。第3章は『失われた時を求めて』の分析に捧げられる。幾多の登場人物のうちスワンとシャルリュス男爵にまず注目する著者は「フォーブール・サンジェルマンで自己を形成した人間が、それに対する陰險な嫉妬という形で貴族社交界の引力を受けている集団に快樂を求めて降りて行き、そこで主宰者の逆鱗にふれて愛の幸福を奪われる」意味において2人がいわば対であると指摘する(212-213頁)。その「社会的原理」(215頁)はスワンとシャルリュスをめぐる「物語のディスクール」(215頁)に

盛られた様々な記号を読者が解きほぐす行為——たとえばヴェルデュラン夫妻の主宰になるサロンをめぐる描写に「神権的支配に類縁する語彙の連続使用」(216頁)を見出すこと——が示すものに他ならないと著者は主張する(215-216頁)。

著者によれば、そういった読み方は『失われた時を求めて』全体に当てはまる。この小説が「経済活動の描写」にも「富の蓄積や金銭的欲望」をめぐる展開にも乏しいという事実(228頁)——「ゾラ的な労働と生産への関心」等を持ち合わせず、「相続資産とその浪費という、いわばフローベールのな主題」に対しても冷淡であること(228頁)——を認めつつ、著者は次のように述べる：

しかしそれにもかかわらず、あるいはそれだけに一層、『失われた時を求めて』は言葉の真の意味での「経済小説」である。…テキストが社会関係を提示し読み取らせるそのあり方が、1つの認識の体系としての経済(学)に投げ返されるからである。(228頁)

つまり、『失われた時を求めて』を手にする者には「社会的実践としての読書」(229頁)が極めて素直な形で可能となるのである。著者による実践を具体的に追ってみよう。『失われた時を求めて』における記号は多かれ少なかれ「価値」、「交換」、そして「信用」に照らして解きほぐされると著者は論じる(229-240頁)。たとえば「自身の信用…を〔当事者〕双方に高め」(233頁)るものでないかぎり「仲介」(231頁)に価値を認めないノルポワ侯爵は小説の主人公兼「語り手」をスワン夫人へ「推薦」(231頁)しない。語り手の父のアカデミー会員への立候補を後押しすることもノルポワは婉曲に拒否するが、それはノルポワと別の立候補者であるフォン大公との間にしかるべき交換が成立しつつあるからである——フォンがノルポワの愛人を優遇する代わりにノルポワがフォンを後押しするというものである(232-233頁)。著者はまた登場人物達が支払う「代価」(240頁)にも注目する。ゲルマント大公の面識を得るために仲介者を求める語り手は4人の貴族達からその価値なしとあしらわれ、結局、大公への贈呈

物となる「商品」(240頁)として彼を扱うブレオーテ侯爵のおかげで願いを果たすのである(238-240頁)。

『失われた時を求めて』は、同時に、登場人物達の「芸術遍歴」(242頁)であり語り手による「芸術論」(244頁)でもある。勿論、「芸術家の仕事の物質的、技術的側面を具体的に記述する」箇所がこの小説にはないと指摘する著者はプルーストとゾラとのさらなる違いをその点に認める(244頁)。では、この小説にあるものは何か。語り手が「誤解」(242頁)を経ながら技術に芸術を見出すことを学んでいく「過程」(245頁)に著者は注目する：

…この過程において…処世術まで含めた様々な技術が芸術のほうに引きつけて考察されるのである。そして語り手は多様な技術、料理や兵法や医者の技術といったものの内にある芸術性を見出し、技術の中に美学を発見しようとする。(245頁)

最終的に「語り手は創造の道へと至」る(254頁)。つまり、この小説を書くという形で彼自身が技術を行使することになるのである。

それまでの章における場合と同様に第3章は毛色を最後に少し変える。著者は『失われた時を求めて』が描写する「習慣」を18世紀終盤に活躍した医学生理学者の「習慣」に関する論考との力線で捉え(267-292頁)、小説の語り手をめぐる「感覚鈍化」(319頁)と「活動の间歇性」(319頁)が小説の構造そのものの複式化を導いていると分析する(325-326頁)。

ここで終わったとしても不思議はないのだが、本書には短い第4章がある。時計をプルーストから巻き戻してルナンを、そしてさらに巻き戻してラマルチーナを扱うこの章は、一見、読者へのボーナスに過ぎない。ところが、その結びにおいて著者はフローベールに言及し「ラマルチーナの小説に不満がなければ、彼は『ボヴァリー夫人』を書くこともなかっただろう」と述べる(368頁)。まるで『失われた時を求めて』を読んでいるかのごとく最後の最後で読者はフローベールの出発点に達するのだ。

本書は『教養諸学研究』および他の雑誌で著者が1984年から2017年までに発表した16本の論文（早稲田大学リポジトリ未収のものが殆どである）に依っている（405頁）。本稿で示したとおり、著者が本書をまとめるに際して施した加筆は極めて巧みである。第1章から第3章までを成す各節は前後と有機的につながり、実質上のまえがきと第4章はさらにその前と後としての意味を持ち、全体にプロットとも呼ぶべき動きが生まれている。文体も良くならしてある。『フランス近代小説の力線』とは、つまり、細かくはフローベール、ゾラ、ブルーストラによる作品群の「磁場」（11頁）であり、大きくは1つのメタ作品なのである。